

(国立大学法人用)

平成29年度「学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解(心のバリアフリー)の推進事業」成果報告書

団体名

福岡教育大学附属福岡中学校

I 概要

1 事業の概要

1, 本事業の目的

附属福岡中学校の特別支援学級と通常の学級との交流及び共同学習を通じて、互いの理解を深め、通常の学級の生徒の多様性を尊重する心を育てることを目的とする。その際、以下の内容を留意し本事業を推進していく。

- 交流及び共同学習の対象を学校内から学校外へ広める。
- 中学生としての発達段階を踏まえた障害者理解を促進するための交流及び共同学習の在り方を探る。また、附属福岡中学校では、「障害者理解」のゴールとして、「多様性を尊重する心」、「障害の有無に関わらず自他ともに価値ある一員であると認め合うことができること」であると考えているが、この事業を通して、中学校段階で求められる「障害者理解」とは何であるかという点も探っていく。
- 交流及び共同学習の効果を高めるための事前・事後の学習の在り方を探る。

2, 本事業の概要

テーマを「スポーツと文化で学ぶ『ダイバーシティ附属福岡中』」とし、次のような障害者理解を目指し、本事業に取り組んだ。

障害のない生徒が、障害のある生徒に必要なサポートを提供することを通して、障害のある生徒と共に同一の行動を行いそれが強化されることで、共生社会の実現への理解を広げること。

スポーツにおいては「ファインピック(福岡市中学校特別支援学級総合体育大会)」における運営補助を中核の取り組みに据え、文化芸術では本校「文化発表会」における合唱ミュージカル(特別支援学級)の共同発表を中核の取組に据えた。これらの成果を平成29年度末を目途にポスターを作成し、福岡県内をはじめ九州地区の中学校に広く発信していく。また、同じ内容を本校ホームページに掲載し、広く社会に対して発信していく。さらには、附属福岡中学校の教育研究発表会や授業づくり研修会の機会などを利用して、本事業の成果を具体的に発信していく。

2 事業の成果

【A：スポーツ】について

①「ニュースポーツ創作」における成果

本校、通常学級生徒1年生は例年福岡市中学校総合体育大会「ファインピック」の競技補助を行っている。共に生きる集団づくりを目的に取り組んでいるものであるが、今年度はその効果向上をねらい、事前に、誰もが参加でき、活躍できるニュースポーツ創作に取り組んだ。その学習過程でパラリンピックの競技種目であるペタンクを行い、達成感や充実感を味わえる競技のヒントを得ることができ、競技創作に取り組む事ができた。

②「ファインピック」における成果

「持久走」や「ボーリング」などの競技補助などを中心に運営に参加した。競技が円滑に運ぶことの達成感や特別支援学級の生徒の競技へ向かうひたむきさを実感し、周りに気遣うことや助け合うことの大切さや周りに支えられていることへの感謝を感じることができた。さらには、相手の立場に立った行動の重要性に気付く事ができた。

③「障害者アスリート講演会」における成果

車いすバドミントンで東京パラリンピックを目標に活動されている小林幸平さんとロンドンパラリンピック金メダリストの浦田理恵選手、ゴールボール全日本男子強化指導スタッフの工藤力也コーチをお迎えし、講演会を実施した。実際に車いすバドミントンやゴールボールを体験することで「パラアスリートのすごさ」を肌で感じる事ができ、そこから障害がある人に対して私たちができることは何かを考えることができた。また、義肢装具士の嬉里さんをお迎えし、義肢装具の特徴や義肢装具士としてのやりがいをお話ししていただいた。ここでは、一人一人の違いに応じた配慮の大切さを学ぶことができた。

【B：文化芸術】について

④「文化発表会」における成果

本校では文化発表会において毎年特別支援学級の生徒によるミュージカルを行っている。今年度はミュージカル実行委員会を発足し、通常学級の生徒と特別支援学級の生徒の一体感をもてるような取組を考えさせた。これは特別支援学級の生徒のお願いという形ではなく、「一緒に考えていく」という姿勢を重要視した。これは「してあげている」というバリアをつくらせないという考えからである。話し合いでは「全校が取り組めるものでなければ意味がない」「特別支援学級の意見を尊重したい」という意見が出された。教師と共に協議を重ねた結果、特別支援学級生徒の負担、時間的な制約を考慮しミュージカルの最後の歌と一緒に歌い、特別支援学級生徒が考案した振り付けをするという結果になった。当日までの練習はお互い楽しく盛り上がり、一緒に作り上げていくという一体感を生み出すことができた。

⑤「言いたか放談」における成果

本校では、総合的な学習の時間の中で、あるテーマに沿って意見を述べ合う「言いたか放談」という学習活動を行っている。2年生において、学校の内外でバリアフリーをすすめるにはどうすればよいか、通常学級の生徒と特別支援学級の生徒と一緒に楽しめるスポーツは何かをテーマに考えを述べあった。今回は、通常学級と特別支援学級の生徒が一緒になって話し合った。実際に交流の機会を持つことで具体的な案に深めることができた。

⑥「生徒会歌創作」における成果

本校、創立70周年を記念し、生徒会歌「キャンパス」を創作した。通常学級、特別支援学級の生徒みんなが歌うことができ、歌いたいと思う曲を目標に創作に取り組んだ。文化発表会を始め、学校の諸行事において全校生徒が合唱することで、通常学級と特別支援学級の垣根を越えた一体感を生み出すことができた。

3 事業の課題とその解決のために必要な取組

今年度の成果と課題を次に示す。

- 「心のバリアフリー」という視点からこれまで取り組んできた取組を見直すことができ、各取組に対し新たな目的意識をもつことができた。
- 新たに「スポーツ」という視点から、特別支援学級への関わりを考えることができ、パラアスリートの方々のすごさを実感することができた。
- 「文化・芸術」の取組を校外に広げることができなかった。
- 今年度の取組を一人一人の日常とどのようにつなげていくのかという具体的な視点からの取組が不十分であった。

次年度に向けて、今年度の取組をベースに共生社会実現に向けた「一人一人の創意工夫に基づく主体的な取組」を推進していく。具体的には、通常学級と特別支援学級の生徒が日常的にふれあえる場の設定をおこなう。また、パラアスリートを招き、講演会だけでなく競技交流の機会を増やす。さらに、文化発表会のミュージカルにおける通常学級と特別支援学級の交流、総合的な学習におけるテーマの設定を付加・修正する。さらに、事業の客観的な評価のために、教育センターなど第三者から推進委員を招聘し、定期的に協議会を開いてアドバイスをいただく。